

An Attempt of Informal Online Social Gatherings in University

| | |
|-------|---|
| メタデータ | 言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-03-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 岡田, 龍太郎 メールアドレス: 所属: |
| URL | https://mu.repo.nii.ac.jp/records/1441 |

オンライン授業支援研究

大学でのインフォーマルなオンライン交流会の試み

～「夜ふかし Remo 会」の開催～

An Attempt of Informal Online Social Gatherings in University

岡田龍太郎

武蔵野大学データサイエンス学科

概要

2020 年度は新型コロナウイルスが流行し、大学はオンライン対応を余儀なくされた。授業はオンラインで行ったものの、大学が持っていた機能のうちインフォーマルな交流を促す側面が失われた。そうした状況を踏まえ、筆者は大学教職員と学生のインフォーマルな交流をオンラインで実現する交流会である「夜ふかし Remo 会」を開催してきた。本稿ではその夜ふかし Remo 会の趣旨について述べるとともに、実際に開催して観察した実態について報告する。

キーワード： 大学内交流, Remo Conference, オンライン交流会

1. はじめに

2020 年度は新型コロナウイルスが流行した年度であり、本学も例に漏れずその対応に追われることとなった。大学の諸機能のうちオンライン化できるものはできるだけオンラインで行うという方針が取られ、授業や学内ミーティング等もその多くがオンライン化された。その中で情報科目を主管する組織である MUSIC¹は本学のオンライン対応を主導する立場にあったと言える。

当初はオンラインでの授業は学生の不興を買うと想像していたが、意外にも学生からの評価はそれほど低くなかった。これは、授業そのものは対面の方が望ましいものの、移動の負担がもともと大きく、そうしたコストが必要なくなるというオンラインの良さがストレートに出たことが理由と思われる。学生のみならず教員間でも同様の意見は散見された。

マスメディアでの報道では、学生の SNS での投稿などを取り上げて「学生は対面授業を望んでいる」といった主張がなされていたが、上記のようにオンライン授業そのものは学生は受け入れていた。しかし「対面授業を望んでいる」という学生の言葉も一概に嘘とは言えないと考える。学生が真に望んでいたのは、対面授業を理由として大学という場に行き、友

¹ <https://www.musashino-u.ac.jp/guide/facility/MUSIC.html>

人たちと遊び語らうことであろう。そしてそれは大学にとって決して付加的な機能ではなく、むしろ本分とも言える機能である。そうした考えは、本学が 2021 年 1 月 25 日に示した 2021 年度の授業をできるだけ対面化していくという方針[1]にも現れている。

そうした観点で本年度の活動を振り返ると、なんとか授業はオンラインで行うことが出来たものの、学科内での交流や課題活動による全学的な交流などは著しく制限されていた。こうした活動を可能にすることは、大学にとって急務であると考えた。

しかし、新型コロナウイルスが狙い撃ちして阻害しているのはまさにそうした交流活動であり、交流の強度を上げようとするそれはそのまま感染拡大の危険性を増大させることになってしまうというジレンマが存在する。感染対策が程度問題である以上、これは本質的に解決が困難な問題である。そのため、対面に回帰するという方針は支持しつつも、交流が不足すること自体は確実であるため、不足を補う手立てをオンラインでも出来る限り用意すべきであると考えた。

そうした状況を踏まえ、筆者個人の試験的な活動として、全学の学生および教職員が自由に参加できるオンラインでの交流の場を開催することとした。この交流会は当初は正式名称はなく、「Remo 会」等の通称で呼ばれていたが、後に「夜ふかし Remo 会」と命名した。名称に含まれている Remo とは、Remo Conference[2]というオンラインでの交流イベントを可能にするサービスの一つである。Remo については後に詳細を述べる。夜ふかし Remo 会は 2020 年 11 月 28 日から原則として毎週土曜日に開催しており、本稿執筆時までに計 14 回行うこととなった。現在も定期的な開催を継続中である。

本稿では、この「夜ふかし Remo 会」について取り上げ、その詳細について報告するとともに、実際にイベントを開催して観察した実態について報告する。

2. 交流に使えるオンラインツール

本節では、夜ふかし Remo 会に用いたオンラインツールである Remo Conference[2]について説明するとともに、その他、学生や大学教職員の交流目的で利用可能なオンラインツールについて紹介する。

2.1 Remo Conference (通称:Remo)

Remo Conference(以下、Remo と呼ぶ)は Remo.co が提供するオンラインカンファレンスツールである。オンライン会議ツールと訳されることもあるが、学会や企業の対外イベントなどの、大規模なイベントを開くのに適したツールである。Remo のホスト権限は有料であり、「プログラミングリテラシー」という情報科目のオンライン授業で、学生同士のグループワークに活用するため購入したアカウントを、授業時間外のより幅広い学生の交流用にも活用した。

オンライン交流会の場として Remo を用いる際の特徴は以下の通りである。

- テーブルが複数用意されており、音声および映像の通信が可能なのはテーブル内だけである

- 1テーブルあたり最大人数は8人である(料金プランによっては6人まで)
- テーブルを含む会場全体が可視化されており、好きなテーブルを選んで移動できる
- どのテーブルに誰が居るか視覚的に理解しやすい
- テキストチャットも搭載されており、全体宛、テーブル宛、個人宛に送れる
- 全体にプレゼンする機能は基本的にホストしか使えない
- 1つのイベントの最大時間は(現状の料金プランでは)5時間である
- イベントの最大参加人数は比較的大きい(現状の料金プランでは500人まで)

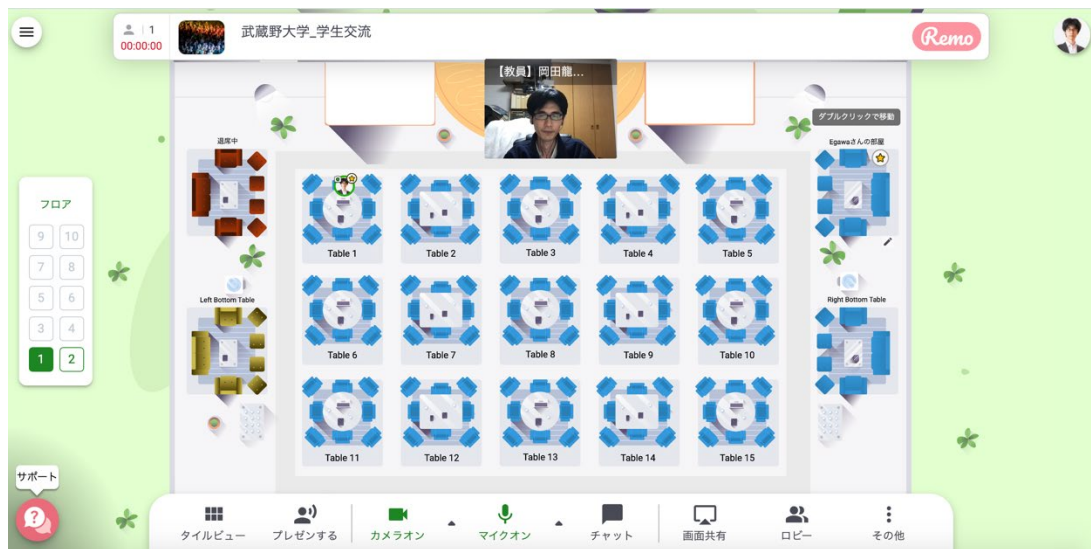


図1 Remo の会場.

Figure 1 Event floor of Remo.

図1にRemoの会場を示す。交流ツールとしては、特に見た目がキャッチーであることや、どのテーブルに誰が居かが一目瞭然で、そのため席移動がしやすい点が優れていると言える。

2.2 交流に使えるオンラインツール

Remoも含め、オンラインでの交流に使えるツールは数多くある。ここでは、「チームコミュニケーションツール」、「メッセンジャーアプリ」、「同期型のオンラインコミュニケーションツール」、「SNS(非同期型のオンラインコミュニケーションツール)」の4つに分類したうえで、「武蔵野大生の利用率」、「利用時に想定されている交流範囲(プライベートorパブリック)」、「アプリorブラウザ」の3つの属性について評価を行った(表1)。チームコミュニケーションツールおよびメッセンジャーアプリは、どちらも同期通信も非同期通信もできるが、使い方の意識が異なり、チームコミュニケーションツールはチーム全体が入っている状態を標準として個人間のやり取りもサブ的に使えると考えるが、メッセンジャーアプリは個人間のやり取りが基本で、大きなグループを作ることはサブ的な機能と考える。「利用時に想定されている交流範囲(プライベートorパブリック)」という項目は、

参加者の範囲が組織のメンバーの範囲に閉じているものをプライベート、閉じていないものをパブリックと捉えて、筆者が各サービスについてどちらへの志向が強いかにについて評価を行った。

各サービスの詳細については割愛するが、いくつか特記事項について触れておく。比較したときの Remo の特徴は、利用時に想定されている交流範囲がパブリック志向であることと、ブラウザでのみ動くという点である。プライベートなカンファレンスを開催することも出来るが、基本的な利用方法としては企業が対外的なイベントを開くようなものを想定している。

表1 . オンライン交流に使えるツール

Table 1 List of tools for online communication.

| | サービス | 武蔵野大生の利用率 | 利用時に想定されている交流範囲 (プライベート or パブリック) | アプリ or ブラウザ |
|-----------------------------|-----------|-----------|---|----------------|
| チームコミュニケーションツール(同期+非同期) | Slack | △ | 両方 | 両方 |
| | Teams | △ | プライベート | 両方 |
| | Discord | △ | 両方 | 両方 |
| メッセージングアプリ(同期+非同期) | LINE | ◎ | プライベート | アプリ |
| | Skype | × | プライベート | 両方 |
| 同期型のオンラインコミュニケーションツール | Zoom | ◎ | プライベート | 両方 |
| | Remo | × | パブリック | ブラウザ |
| | mocri | △ | プライベート | アプリ |
| | Clubhouse | △ | 両方 | アプリ |
| SNS(非同期型のオンラインコミュニケーションツール) | Twitter | ○ | パブリック | 両方 |
| | Instagram | ○ | パブリック | 両方 |
| | Facebook | × | 両方 | 両方 |
| | Yammer! | × | プライベート | 両方 |

また、ブラウザでのみ動作するという点は、インストールが不要で手軽であるという利点がある反面、利用者によってはトラブルが起きやすくなっている。

その他のサービスの中で、特に学生間の課外活動での交流に適していると考えられるものとして Discord を挙げておく。これは音声通話機能が強化された slack のようなもので、非同期通信による連絡と通話による会話をシームレスに行うことができ、興味のあるサークルを探すといった用途にも適していると考えられる。

3. 「夜ふかし Remo 会」の提案

本節では、本稿の主題である夜ふかし Remo 会の詳細について述べる。

3.1 ねらい

夜ふかし Remo 会は、大学生が大学で行っていた交流のうち、オンライン化によって失われてしまった部分を補完することを目的としている。失われてしまったものは何かというと、インフォーマルなコミュニケーション全般ということになるであろう。例えば、授業が終わった後の教員や学生同士の会話、食事をしている際の会話、ゼミの後の研究室の会話、課外活動中の会話などである。インフォーマルな場での交流を行うことにより、参加者同士が生身の人格に触れる機会とすることを目指した。

3.2 夜ふかし Remo 会の運営方針

夜ふかし Remo 会の主な活動は雑談であり、特にイベントらしいイベントは行っていない。イベントを行わないということは実は当たり前のことではなく、この会の方針を形作る重要なポイントである。大学教員が交流イベントを開くときには、教員の専門性に基づいて何かを教えることや、あるいはライトニングトークなどのように学生の学びを促すような目的を持っていることがほとんどである。しかしここで達成すべきことが、教職員と学生がお互いの関係性を一旦忘れて、お互いの生身の人間性に触れることであると考え、「教える・教わる」といったような関係性を思い起こさせる要素は極力少ない方が望ましい。また、主催者である著者の負担を考えると毎回凝ったイベントを作ることは不可能であると考え、それよりも頻度を増やす方が望ましいと考えた。

会に参加可能なのは武蔵野大学関係者とした。これは基本的には現在所属している人という意味で、学生のみならず、著者以外の教員、職員も含んでいる。大学が持っている交流の機能を実現するという趣旨からしてこれは妥当と思われる。また、学生が安心して参加できることを担保する意味もある。また、当初は予定していなかったが、2021 年度からの新入生からも参加希望があり、趣旨に合致していると考えて途中からそれも可とした。

参加の告知は主に筆者の twitter 上で行ったほか、著者の担当した授業での Google Classroom 上や Teams 上で行った。また、他の MUSIC 教員が自身の授業の Teams 上で告知した例もあった。参加者の多くは twitter 経由であったが、授業単位での告知からの参加者も見られた。

開催日および時間は、当初は毎週土曜日の 20 時から翌日 1 時とし、途中で 21 時から翌日 2 時に変更した。開催時間を変更したのは、後ろ倒しした方が参加人数が増えそうだったことと、主催者である著者の都合による。大学教員が開催するイベントとしては異例の遅さだが、インフォーマルさという趣旨には合致していると考えた。一回の開催時間は 5 時間であり、これは Remo のイベントに設定できる上限によって決まっている。

会の名称は当初は決まっておらず、主催者である筆者は「Remo 会」と呼んでおり、参加者も概ねそう呼んでいた。その他のイベントでの Remo の利用例が増えるにつれ固有の名称があった方が良くと考えるようになり、改めて筆者が「夜ふかし Remo 会」と命名した。この名称にもインフォーマルであるべきという考えを反映させている。

Remo 利用中はカメラをオンにすることを推奨とした。これは目的が交流であるため、その方が望ましいと考えたことと、Remo ではカメラをオンにしていない状態だと誰が話しているのか分かりづらいという事情による。ただし、カメラをオンにするかどうかは参加者本人の判断に任せている。

4. 「夜ふかし Remo 会」の開催

本節では、Remo 会を実際に行った結果と考察について述べる。

4.1 開催日

開催履歴は以下の表の通りである。2021 年 3 月 7 日までに計 15 回開催した。なお、2020 年 12 月 31 日は土曜日ではないが、この日は大晦日の年越しに合わせて開催し、その週の土曜日は休会とした。

表 1 イベント(夜ふかし Remo 会)の開催日一覧。

Table 1 List of event dates.

| |
|---|
| 2020 年 |
| 11/28, 12/5, 12/12, 12/19, 12/26, 12/31(木) |
| 2021 年 |
| 1/9, 1/16, 1/23, 1/30, 2/6, 2/13, 2/20, 2/27, 3/6 |

4.2 会の様子

運営上の方針としては、基本的に主催者である筆者がホストとなり、互いの自己紹介を促し、話題が乏しい場合は質問するなどして話題を提供することとした。また、来場したばかりの参加者には Remo の使い方の確認を行い、人が話しているテーブルに合流させた。

初期の頃から参加していたのは、武蔵野大学の中でも twitter の利用頻度が高い学生であった。これは告知のメインが twitter だったことによると思われる。また、事前にプログラミングリテシーを受講しており、twitter と合わせて二重に連絡が届いていた学生も参加していた。話題としては、twitter の利用者が多かったため、twitter を利用している武蔵野大生についてのものが多かった。ただしもちろん話題はそれに限られてはおらず多岐に渡っていた。

Remo に搭載されているホワイトボード機能でお絵かきをする者も多く、話題に乏しい場合もそうした形で交流が続けられた。また、会で話された話題やホワイトボードで描いた絵

を twitter に投稿するものも多く、そうした行動によって会の存在が twitter ではますます広く認知されることとなった。

初期の参加人数は、Remo の 1 テーブルに収まる 8 人以内であることが多かった。すべての参加者が開催時間中全てに滞在しているわけではなく、参加者は自由に出入りする。20 時から参加する学生は少なく、23 時頃から増える傾向にあった。これには一部の学生がアルバイトを終えてから参加するという事情も関連していた。参加者が少ない時には、22 時ぐらいまで筆者以外に 1 人しか集まらないこともあった。

参加学生の学科や学年は多岐に渡っていたが、特に人間科学科と日本文学文化学科の学生が多く、初期はこの 2 学科で 5~7 割を占めていた。これはこの両学科の twitter 利用者が多いことや、初期から当会の参加者がいたために口コミが広がりやすかった事によると考えられる。現在は学科の割合としては人間科学科はやや多いものの、その他は一様に近づいていっている。学年は、初期は 3 年生が少なく 1,2,4 年生が同程度であったが、次第に 1 年生と新入生が増えていっている。

学生以外の参加者としては、筆者以外の教員が 4 名参加した。内訳は、MUSIC 教員が 1 名、MUSIC 開講授業のサブ講師が 1 名、データサイエンス学科の教員が 1 名、日本文学文化学科の教員が 1 名となっている。職員の参加はまだない。

会を重ねるごとに新入生の参加者が増えていった。新入生は基本的に twitter で先輩学生をフォローし、そこから会の存在を知ったようである。それに伴って合計の参加者も増加する傾向にあり、直前数回の参加者は、述べ人数で 15~25 人程度であった。常連となったメンバーもあり、そのため筆者がホストの役割をし続けなくても会話が十分続くようになってきている。ユニークな例として、Remo 中の離れたテーブルにずっと居座り、テーブルへの来訪者が来た場合のみ会話するというスタイルで利用する学生がいる。これもホストの役割を持つメンバーが増えていることの例と考えることができる。

カメラをオンにすることを推奨としたが、多くの学生はカメラをオフにしていた。なお、筆者は常にカメラをオンにしていた。学生にはカメラをオンにすることにそれほど抵抗感があったわけではなく、一時的にカメラをオンにするケースは男女ともに少なくはなかった。また、自作の 3D アバターを作ってその映像で参加する学生(新入生)がおり、さらにその学生にアバターを作ってもらってそのアバターで参加する学生もいた。他にも、ボイスチェンジャーを利用して声を変えて参加する学生もいたが、それも個人情報保護の観点というわけではなく、遊びとして行っているだけのようであった。カメラをオンにしつつ、被り物やマスクをしている学生も見られた。

基本的には雑談をしているだけであり、それを主目的としているが、建設的な話し合いも一部行われた。例えば、本学の学友会執行部の学生も数人が参加しており、会の中で、来年度の新歓活動等において、オンラインでの環境を整える方針について議論することが出来た。また、筆者の専門にかかる話として、プログラミングに興味のある学生にプログラミングの初歩を手ほどきした事などがあった。

図2は夜ふかし Remo 会の一場面である。2つのテーブルに分かれて参加者が集まり、それぞれが会話している様子が見て取れる。



図2 「夜ふかし Remo 会」の一場面(一部プライバシー保護のため修正).

Figure 2 A scene of the "Nighthawk Remo".

4.3 開催による効果

夜ふかし Remo 会の開催によって何か良い効果があったかどうかについては、現時点では分からない。少なくとも継続して参加している学生や教員は楽しんでいると考えられ、本会以外の場での交流も盛んになったと考えているが、定量的な評価は行っていない。

4.4 問題点

明確な問題点として、Remo への接続はハードルが高いことが上げられる。スマートフォン等のデバイスで利用する際は機能が制限される上に、PC で利用するにしても、PC スペックや通信速度について高目のハードルがあることに加えて、マイクやカメラへの接続でも問題が頻繁に起きている。これは Remo がブラウザ上で動くアプリであることに依拠している面が大きいと考えられる。こうした条件のため、参加したくても事実上できない学生が存在している。

4.5 考察

夜ふかし Remo 会の参加者は増加傾向にあり、教職員と学生同士のインフォーマルな交流を実現するという目的は達成できていると考えている。しかし現在の参加者は一回で 20 数名といったところであり、大学全体を考えると僅かな人数にしかアプローチできていない。こうした交流を行いたい学生がどれほどいるのか分からないが、現状のままでは不足していることは明らかである。しかし、この活動をスケールアップさせる際に、どのような方向に伸ばしていけばよいかということは議論のあるところであろう。考えられる案は、1. 告知を増やして夜ふかし Remo 会の参加者を増やす、2. 複数のホストがそれぞれ別の会を開会する、の 2 つである。

現状の夜ふかし Remo 会は、主催者である筆者のキャラクター性に依存するところが大きい。参加者の多くは筆者の twitter をフォローしている学生であり、筆者のツイートの雰囲気や、他の学生とのやり取りを見て参加するか否かを決めていると考えられる。したがって筆者と相性の悪い学生は参加することは難しい。これは必ずしも悪いことではないが、大学が公的に学生の支援を行うという考えとは齟齬がある。そのため、より望ましいのは、様々な価値観を持つホストがそれぞれ別の会を開催し、多様な学生が参加可能な状況を作ることであろう。また、新しい会を作らなくても、同好会等のサークルは元々同様の機能をもっていると考えられるため、そうしたサークルのオンライン上での活動を活性化させることもインフォーマルな交流の促進として効果的であると考えられる。学科内での交流も同様であり、Remo 等の活用で改善できる点は多いと思われる。

一方で、夜ふかし Remo 会のような会を開催するホストの負担はそれなりに大きいため、ホストを担当できる人(教職員または学生)は多くないと思われる。その点では、現状開催している夜ふかし Remo 会に大人数を収容し、テーブルに分かれて利用するのも現実的な案としてはありうると考えられる。この意味では幸いなことに、Remo では仕様によって同時に 8 人までしか同一テーブルに入れられないため、ホストの把握できる範囲は知れており、ホストの場に対する支配力はそれほど高くない。そのため、価値観の違う人達が 1 つの Remo の会場に集まってもそれほど問題なく交流が行えるかもしれない。しかしその場合でも、少なくともテーブルという場をホストできる人員は多数必要になると考えられる。

なお、今回の活動を通じて、筆者が twitter を利用している理由に、学生とのインフォーマルな交流をするためという点があったことを改めて実感した。筆者は授業で twitter アカウントを公表し、学生からのフォローを歓迎し、フォローされた場合は必ずフォローを返すという方針を貫いてきた。それはまさしく、学生は教員を授業での姿だけではなく、素の人格もセットで観察すべきという考えのもと行ってきたことである。これは今回の夜ふかし Remo 会の趣旨と一致しており、もともと twitter で行ってきたことの延長線上に夜ふかし Remo 会の開催があったという、自然な流れであったと考えることが出来る。逆に言えば、そのようなマインドのない教員には、こうした場を運営することは難しいのではないかと

考える。

会の開催方針として一番重要だったのは、定期的に毎週開催すると決めたところであったと考えている。これは時間的拘束の観点では大変ではあるものの、いつ開催するかを考えなくても良いという利点があった。そうでなければ忙しさにかまけて開催できなくなっていったであろうと想像される。その意味では、毎週でなくても定期的でありさえすればよかったかも知れない。最初は参加者も少なく労力に見合わないのではないかという不安もあったが、次第に続けていることの効果が出てきて参加者も増えていった。そうなるかどうかは、最初の決断の時点では未知数だったことは記しておきたい。

5.おわりに

本稿では、大学教職員と学生のインフォーマルな交流をオンラインで実現する交流会である「夜ふかし Remo 会」の趣旨について述べるとともに、実際に開催して観察した実態について報告した。「夜ふかし Remo 会」によってインフォーマルな交流を実現するという目標は一部達成された。さらに、こうした交流活動を大学全体に拡大していく際に必要になる事柄について考察した。

今後の課題として、本件の取り組みをさらに広めていくことや、学術的見地からの考察を行うことが挙げられる。また、学生がオンライン上で課外活動を行うための環境整備を行うことが挙げられる。

謝辞 本稿で述べた活動の主旨を理解していただき、後押ししてくださった武蔵野大学の渡邊紀文准教授および上林憲行教授に感謝いたします。

参考文献

- [1] 令和3（2021）年度の授業方針（対面授業の実施）について：<https://www.musashino-u.ac.jp/news/20210125-07.html> (参照 2021-3-7)
- [2] Remo conference: <https://remo.co/conference/> (参照 2021-3-7)